

岐阜米穀(株) メールマガジン

今回のテーマは「せめぎ合う食糧と燃料」

ロシアのウクライナ侵攻による貿易の停滞に伴い、途上国を中心とする国々が食糧危機に直面してきています。主食の小麦、トウモロコシなどの穀物価格が高騰し、食糧入手が難しく、飢餓のリスクが一層高まっているからです。

ただ、世界全体を見渡すと、決して食糧、とりわけ穀物が不足しているわけではない。用途の違いによって、需給逼迫が生じているだけである。

米農務省（USDA）によると、2021 年度の家畜飼料に利用される穀物は、世界全体で、小麦が約 1 億 6000 万トン、トウモロコシでは約 7 億 5000 万トンに上る。小麦生産量の約 20%、トウモロコシの約 65%が家畜の餌になる計算だ。

また、穀物の多くがバイオ燃料用に使われている。トウモロコシを原料としたバイオエタノールの生産がその代表例だ。バイオエタノールの最大生産国の米国では 21 年度にトウモロコシ生産量の 35%に当たる約 1 億 3500 万トンをエタノールの原料にした。つまり、トウモロコシを自動車の燃料として消費している。中国も小規模だが、同様の取り組みを進めている。

もし、穀物を原料としたバイオエタノールの生産をやめ、その分の穀物を食用に使い、バイオエタノール向けに使われた耕地の一部を小麦生産に切り替えれば、食料危機は大きく軽減されるだろう。

残念ながら、そうした転換が今、起きる可能性は極めて低い。トウモロコシを原料としたバイオエタノールは、政策的にもガソリンより割安な燃料となる一方で、化石燃料ではないため「脱炭素にも貢献する」として促している。

米バイデン政権は、石油価格を引き下げするため、エタノール生産を奨励し、これまで大気汚染を悪化させるとして、禁止してきた夏場のエタノール混合燃料の「E15」販売も認めることにした。

現実的に、トウモロコシの国際価格の高騰が続く限り、農家は、用途に関係なくトウモロコ

シを作り続けるだろう。その中で、いかに食糧と燃料の世界バランスを整え、途上国の食料危機を緩和するか、各国の知恵が問われています。